

## パラグアイ

### 移住者の声



#### 移住雑感

パラグアイ在住(大内町出身) 平井 孝吉

“緑と青い空、輝く太陽”この言葉は香川県日本語派遣教師からよく聞いたパラグアイの印象である。この国を第二の故郷として選び、多くの移住者がこの大自然に挑戦を試みた戦後の1960年前後の移住でさえも、出発に当っては各移住者の出身地はもとより、県庁でも壮行会を開き、当時の県知事から記念品と激励の言葉を頂き、行く人も送る家族も別れに涙し、全く未知の世界にでも旅立つような悲愴な思いで祖国を後にした方も多かったと思う。私も思い出の詰まった古里、親兄弟、友人とも今生の別れかと行く先の不安と希望が交錯する中、西日本から集まった移住者とともに神戸移住幹旋所で出国手続きを済ませ、三木町の荒元さんの同伴家族としてブラジル丸に乗船したのは1961年(昭和36年)3月2日であった。

神戸港を出港後、横浜港に入港、ここで東日本からの移住者も乗船し、船内は日本の北から南までの環境、職業、移住先の異なる大集団が出来上がった。共通するのは日本人であり日本の文化、各地方の文化を持ち、各々の夢の実現を海外に求めて移住を決意した人たちである。ブラジル丸はこの凝縮された日本を積み込んでの船出である。

横浜出港後、時間の経過とともにあちこちに小さなグループが現れた。移住によって将来が約束されたかの如く意気盛んに語る人、夢がもう現実になったかの如く語る人、静かに聞き入る人。様々であるが、同県人が集まり語り合う姿で、船内でも同県人はお互い最も近い存在になった。

太平洋を横断し最初の寄港地ロスアンゼルスに入港したが、移民は上陸を許可されず一日中陸地を眺めていた。また、船内でも移住者は一、二等船室への通行も禁止されており、これら船客は我々には天上の人で、この時から移民と云う言葉には悲愴な意味合いを感じ余り好きにはなれなかった。幸い移住者引率員として香川県庁の渡課長さんが二等船室にいて同県人の誼で時々船室に呼んで下さり、また別の雰囲気を楽しむ事が出来た。

航海中に赤ちゃんが一人誕生。船長が万里子と名付けた。一人の女性が亡くなられた。海葬であった。其の時の物悲しく聞こえた別れの汽笛が今も脳裏に残っている。一家の家長が病気になる家族ともども日本へ送還された。ブラジルへ移住する独身青年が精神病で下船すべきサントスから日本へ帰る移住船で日本へ送還された。惨めであった。

この限られた  
小さな空間と短  
い時間の中で  
種々なドラマが  
みられ、移住の  
第一歩は自分  
への挑戦であ  
ると思った。

母国を出てか  
ら50余日、パラ  
グアイに到着し  
各々の移住地

に入植した移住者を待っていたのはうっ蒼と茂る人跡未踏の原始林であった。日本を出る前に聞いていたものの想像以上の現実に茫然とされた方もおられたと思います。この原始林を伐採し、焼き、畑にし、換金作物が植えられるまでには数年掛かる、其の上



2000年(平成21年) 県人会新年会

交通の便も悪く電気もなく、ラジオ、新聞もない、文明の世界から閉ざされ、豊かさの一片も見出せない生活に挫折感を味わった方も多いと思う。しかし強靱な精神力と忍耐、強い家族の結束で幾多の苦難に耐えながら広大な原始林に立ち向い、数十年後にこれを大穀倉地帯に変貌せしめた自然への挑戦者の姿には何かに導かれた神憑った使命感をも感じないではいられない。

ここは母国から最遠の地であり開拓と云う苛酷な生活環境から移住者は望郷と郷愁の念が人一倍強く、同県人間の繋がりも強く、よく県人同士で夜遅くまで夢を語り、また、故郷の話に花を咲かせ、お互い励まし合い、明日への心の糧としていたと思う。

当地に母県との交流と県人相互の親睦を目的とした香川県人会が創立されたのは、1973年(昭和48年)4月22日、当時の金子県知事が当地を訪問された時、カピアタ市在住の森川さん宅で何も無い当時の事として牛一頭と県人苦心作のサヌキウドンや手造りのご馳走(?)で心のこもった歓迎会を開いた時、金子知事の推奨で県人会が誕生したと聞いている。

当時は数家族の集まりだったこの会も、母県のご支援ご指導と時間の経過とともに大きく成長し、親睦会等では他界された一世の方も多くだんだん小さくなるサヌキ弁と日本語の一世グループ、日本語・スペイン語の準一世(若い一世)と二世グループ、余り日本語の分からない三世(パラグアイ人や其の家族)のグループにわかれ、今では移住者と其の家族は約50家族、其中25家族は一世家族である。県人家族もこの大地に広く深く根をはりつつあります。

小生、1961年(昭和36年)4月25日現地に到着後、ピラポ移住地に入植する同船者や県人の皆さんとお別れし、チャベス移住地の森川さん宅で数ヶ月間お世話になったが、移住地の状況が分かるにつれ一人でしかも斧一つで原始林の大木に挑戦するには余りにも非力と判断し、自然への挑戦は避けて通る事にし、日本で習得した自動車修理技術を生かしパラグアイの技術者に挑戦するためアスンシオン市に出る事にした。しかし、この行動は当時の移住者のお世話をしていた海協連には歓迎される事ではなかった。農業移住者は、入植後2年間は移住地からの転住、転職は出来ない事になっており、パスポートは海協連に預かれ手許にはない。但し、アスンシオン市で仕事をするにはパスポートが必要となる。どうしてもパスポートを貰わねばならない。意を決して事務所を訪ね事情を説明したところ、予想通り「こんな馬鹿者がいるから困る！」と大声で怒鳴られた。後は平身低頭のみ。幸いパスポートは頂いた。1962年ごろのアスンシオン市内および近郊には日本人は少なく、香川県人は笠松さん家族、今雪さん家族と小生だけだったと思う。やはりここでも同県人である笠松さん、今雪さんにお世話になりトヨタ代理店の修理部に入社し、2年後からサービス部の責任者としてナンバーワンを目的にがむしゃらに働いた。其の後何の天罰か運命が知る由もないが、3度死に直面した事がある。

1回目は感電。県人の真鍋さんに助けられた。2回目は工場内の事故で瓦礫の下敷きになるところだった。3回目はくも膜下出血で倒れた。当地のJICAで家内の呼び寄せ手続きを済ませて一週間後の出来事だった。

一人ではどうする事も出来ない、絶望的だった。

数日後、神父さんが来て枕元でお祈りを始めた。この時は本当に死ぬかとも思ったが、大の親日家の下宿のご夫婦が親身になってお世話下さった。このご夫婦は今も命の恩人と思っている。

県人会はなくとも、笠松さん、森川さん他、県人の方にも大変お世話になった。お蔭で一命をとりとめ後遺症も殆どなく約7ヶ月後にもとの職場に復帰出来た。小生の病気のため渡航が遅れていた家内も移住花嫁として翌年の3月アルゼンチン丸に乗船出来た。幸運にもこの船にはNHKのドキュメンタリー「AR29次航海」の取材班が乗り合わせ、出発からブエノスアイレスまでの航海中の移住者や船内の状況を取材し後日放映されたが、このビデオテープには家内の取材場面もあって、この貴重な移住の記録は我が家の宝物である。このような機会に巡り合えたのも小生の病気のお蔭であるが結婚は無一文からの出発だった。

幸運と不運、生と死はいつも背中合わせにあるようだ。

其の后再発もせず、現在65歳、トヨタ代理店のサービス部の責任者としてまだ現役で会議、研修等で中南米の各国、北米をとり回っているが、健康上の理由から当初の目的だった独立が果たせなかった事を残念に思っている。

ここは暑いに住めば都、終わり良ければ全て良し。となれば幸いと家内ともども頑張っている。

当地も戦前移住からすでに67年、どの移住者も日本人としての誇りを忘れる事なく誠実、勤勉、正直等を自ら実践、「信頼」を勝ち得る事により当地と日本の国際交流にも貢献するとともにこれを遺産として次世代に残した、二世、三世がこれを継承しますます大きく発展する事を願い、また、パラグアイがより住みよい国に変貌する事を祈念している。

最後に、「みどり、うるおい、にぎわいの創造」を目指して母県がますます発展される事をお祈り申し上げます。